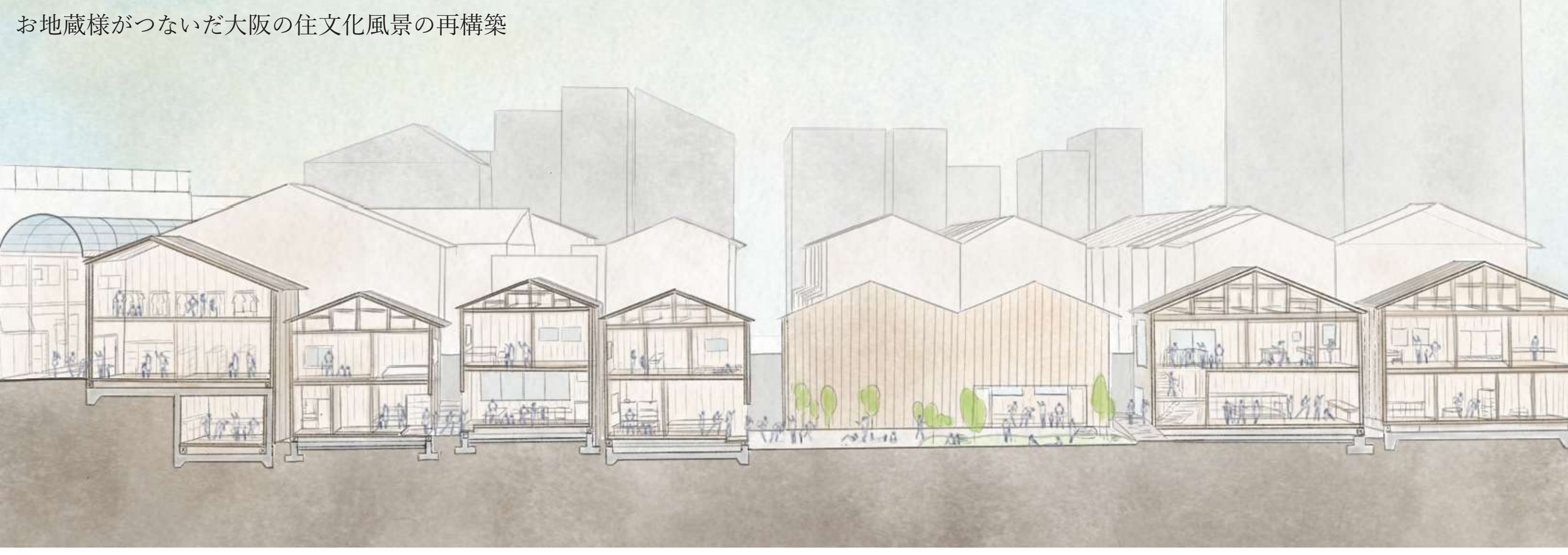
お地蔵様がつないだ大阪の住文化風景の再構築



■大阪の元気な住の文化を次世代へと更新する

私たちが提案する敷地はかつての豊臣大坂城の堀の南側に位置する空堀地区である。太平洋戦争の戦災を免れたこの場所では、古くから現存する長屋や路地によるまちなみを今も見ることができる。

まちに踏み込んで見えてきたのは、昔ながらの大阪の賑わいではなく、日々希薄化していくまちのコミュニケーションであった。

そこで、かつての大阪人の手によって作られた、地を活かしたまちなみを新陳代謝させ、現代の人の活動に沿うように手を入れていく。大切にしたいことは、形を残して単に中身を変えるという開発に留まらないこと。使い余している家の一部を間借りして多用途化し、まちの閉塞感を明るさに変えていく。使いようのない土地はまちの中庭にし、風や光を取り入れ、外部の人も訪れやすい場所をつくっていく。

そして、江戸時代からこのまちのコミュニティを守り続けてきたお地蔵様を起点に新旧のコミュニティを繋いでいく。

■空堀地区のまちなみ形成の歴史

近世の大阪復興と市街地開発のきっかけに、空堀地区界隈の東半分が武家地、西半分を市街地、谷町筋・上町筋は寺町として開平された。市街地として開平された西半分は、瓦の土取場となり、その後町人町として発展した。東半分は鉄砲奉行の屋敷が並ぶ武家地として発展した。

その後、近代に入ってからは、近世の町割を継承しながら宅地開発が進行した。大坂三郷の市街地開発では、格子状の両側町で、敷地の通り側に居室を、敷地奥に借家を置く様式が主流となるが、空堀地区では、通りから敷地奥の借家へと続く路地が縦横に形成された。

1845年頃の空堀界隈の町割り
大阪建設史夜話附図「弘化改正大坂細見図」より抜粋

■空堀地区における課題

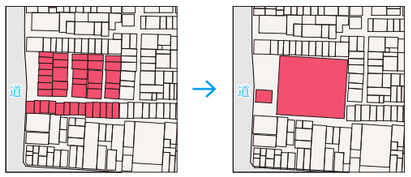
①空屋の増加、建て替え困難な敷地条件

路地にのみ面する住宅は建て替えが困難であり、住人の高齢化もあり空き家が多数存在している。民泊として利用される例もあるが住人との軋轢が目立つ。

道の幅員が狭いため、再建築不可に該当し、放置されているケースが多い

②開発による均質化の懸念

幅員のある道路に面する敷地は一体で開発され、マンションへの建て替えが行われている。現在も数カ所で工事が進んでおり、日々長屋は姿を消しつつある。



約10年前　→　現在

③信仰文化の希薄化

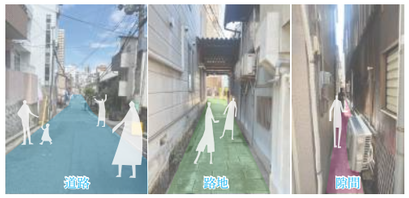
空堀地区には多くの地蔵等が点在しており、古くから地域住民に祀られ、コミュニティの起点となっている。現在では管理者以外は無関心という実態も見られ、今後の住民の入れ替わりにより担い手の断絶が懸念される。

8月23日,24日に行われる地蔵盆についても、コロナの自粛をきっかけに、ここ数年で急激な縮小化傾向にある。

■空堀地区のまちなみの特徴

①多様な路地空間

まちを構成するみちは、幅員4m以上の道路、1.8m程度の路地、家間の60センチ程度の狭い隙間で形成されている。路地や隙間は単に空白ではなく、住人の生活の一部分としての利用が今もなされている。



道路の種別

特に、路地(ろーじ)は、共同で使われてきた井戸・水道などの共用施設とともに、今なお大切にされているほか、屋根から高くのびる物干し竿(トンボ) や植栽などと共に、路地に住む人々の生活・文化が感じられる貴重な資源となっている。

②長屋

戦災を免れたことにより戦前からの長屋が多く現存しており、当時の区画と共に形を残している。特に、大阪の昔ながらの都市住居のまちなみを色濃く残しており、歴史的資源が多いエリアとなっている。

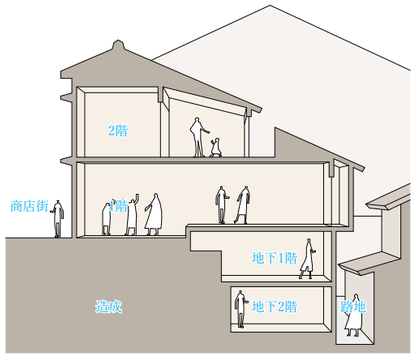
地域の聞き取りでは古来は「くノ一」が住んでいたと言われる長屋も見られ、大阪の都市住居の原型と賑わいが垣間見える。

はめごろしの格子

採光確保のための2Fセットバック

③高低差

空堀という地名は豊臣大坂城三ノ丸南側を守る空堀があったことが語源とされている。瓦の土の採取場所等にもなっていたため、現在も高低差が顕著に残っている。そのため、高低差を住居に取り込む工夫が見られる。

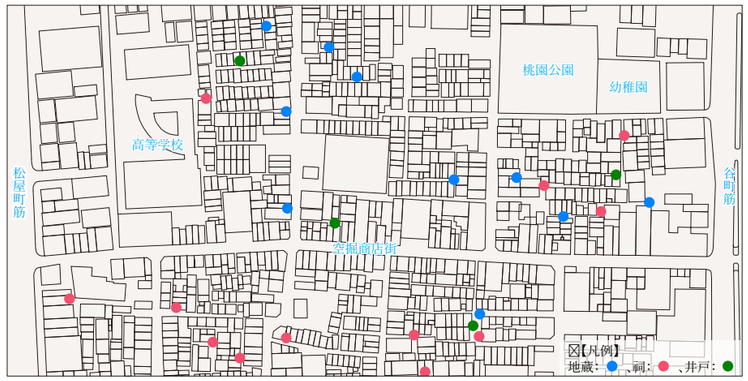


■空堀地区の地蔵文化とコミュニティ

①地蔵・稲荷の点在

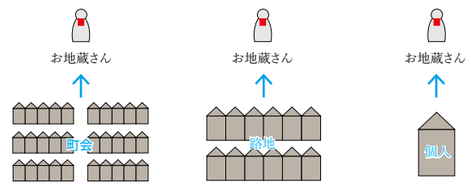
戦災から逃れた空掘地区の路地の間には、長屋と共に戦前から残る地蔵・祠・井戸が存在する。

現在もこの地蔵文化が先人から受け継がれ、明確な区画はないがこれらの地蔵等を中心として近所付き合いや井戸端会議が行われ、空掘のコニュニティは地蔵や歴史と共に形成されている。



②地蔵等を中心としたコミュニティ

地蔵等の管理は、ご近所付き合いによるコミュニティ形成と密接に繋がっている。その中で、空掘の地蔵等の所有と管理は、地蔵毎に独自の管理・所有が行われており、3パターンが存在する。



①町会での所有　②路地等による所有　③個人での所有

②と③の場合は、その共同管理コミュニティ内での当番制が行われている。日頃の地蔵の世話や年1回の地蔵盆を通して、ご近所間での会話や住人同士の認知が行われ、狭い地域単位でのコミュニティが形成されている。

時代の変遷と共にコミュニティの形式も変化し、醤油が切れたので隣の家に借りに行くというようなコミュニティは今は見ることはない。
人の距離感が離れるにつれ、1.8mの路地を挟んで密集するこのまちなみは少しずつ閉塞感を帯びてくる。
小さな店やお年寄りと若者が共生するオープンオフィス、かつて軒先に集中していたコミュニティをまち全体に広げていく。

まちの中庭

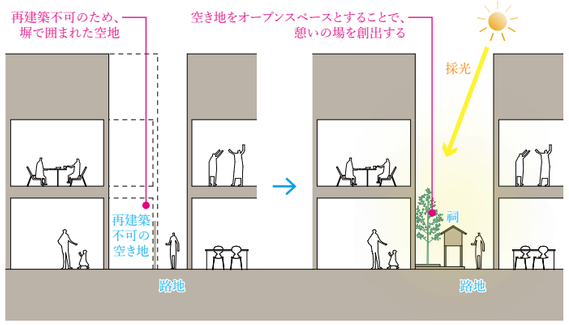
オープンオフィス

まちの階段室

■空堀地区を元気にする手法

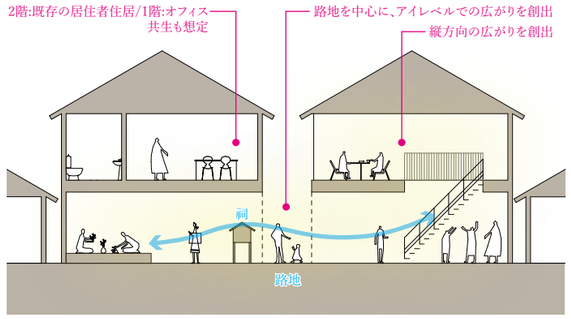
①空き地を活用したオープンスペース

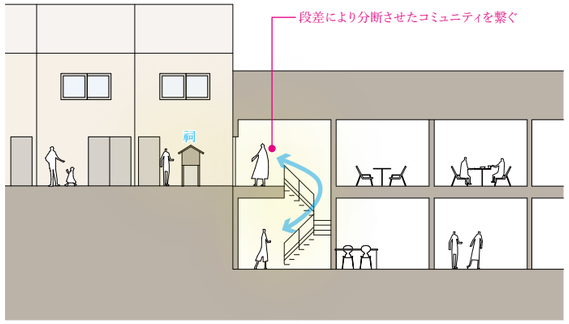
長屋が解体され空き地になったが、道路幅員が狭いため再建築不可となり放置されている敷地を計画地とし、緑地や休憩スペースを設ける。
それにより、長屋が密集したエリアに光や風を取り入れ、後継者がいなくなった祠を移設し、地域の人々が気軽に集まれる憩いの場を創出し、希薄化した地域コミュニティを再構築するようなオープンスペースを提案する。



②空き家を”間借り”する

放置された空き家をオープンスペースとして活用し、街に開放する。
それにより、地域の人々だけでなく、新しくやってきた人が移住体験や新規事業のお試しスペースとして間借りすることで、空堀の昔ながらのまちなみを守りながら、新規参入者による新しい風を呼び込み、地蔵文化を起点に空堀特有の元気を取り戻すような、間借りによるオープンスペースを提案する。



②まちの階段室

段差が多く路地同士の往来がしづらい空堀に、擁壁沿いの空き家に階段を設けることで、地域に開放された階段室を持つオープンスペースをつくる。それにより、段差で分断されていた路地同士の往来を可能とし、従来分断されていたコミュニティ同士を繋げることで、空堀全体での地域住民や新しくやってきた人々の流動性を促進し、空堀の新しいコミュニティを創出するようなオープンスペースを提案する。